



12月の聖句

ひとりのおとこのこが わたしたちに あたえられた イザヤ9章5節

12月のさんびか

かみさまのおやくそく

幼児さんびか 27

喜びあう



降園時の門に行くとき年長さん数人が「ポスト、見た？」とニコニコ。そっと覗くと美しい柿の葉のお面がぎっしり。愛らしさに「へ～!!」と感嘆すると「やった～！」「びっくりした？」と満足気。年中♡ちゃんは両手で大事そうにアオギリの大きな葉を持ってニコニコ登園。年少男児数人は花水木を見上げてゆさゆさ。屈みこんで見つけた宝、ぷくぷく掌に小さく綺麗な赤い実。秋満開。

今月は「ひとりの男の子が私たちに与えられた」という聖句。イエスさまのことが示されているのですが、ふと私達の目の前にいる子ども達を思い浮かべて「ひとりの○くんが、ひとりの○ちゃんが私達に与えられた」と考えてみると…どうでしょう？

今から数十年前のこと。私が初めて命を授かった時、牧師先生から頂いた言葉「授かった命はあなたのものではありません。神様からお預かりした命です。だから自分の子どもとしてではなく、神様の子どもとして大切に育てなさい。」全身が「はっ」として、一瞬電気が駆け巡ったような感覚が蘇りました。

人は懸命に生きているけれど、「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。マタイ福音書7:3」と聖書に記されているように、自分の罪を知りながら、相手が大人であれ、子どもであれ、私達は時として人を批判してしまふことがあります。一方で、自分は安全な所にいて対岸の何かを批判することはたやすく、そこに至る過程・背景を慮り、支え、抱え続けるのは生半可なことではないと知っています。「人を裁くな。あなた方も裁かれないためである。」とも同じ箇所書かれています。裁かれないために、ではなく、私達が神様から命を与えられ、赦され愛されているありのままをまず謙虚に受け入れ、立場は違えども、状況の変化を希求しながら、こうかああかと暗中模索し、小さな変化を喜び合いながら歩み続けています。

日本では、今年も街はイルミネーションで飾られ、クリスマスソングが流れています。その多くは讃美歌であり、イエスさまの降誕を待ち望む歌、祝う歌。ただ世界に目を向けると戦争は依然続いている…。

先日、児童文学者：故中川正文氏の生前の講演の中で「すみれ島」(文：今西祐行 絵：松永禎郎)の朗読を聴きました。太平洋戦争ののち、南の海の小さな島に、ひっそり咲くすみれの花々…。特攻に散る直前の若者達と小学生の交流を描いた言葉は、作者の思いや平和への願いをしっかりと掌握された中川氏の強く深い思いとともに、心に深く染入りました。特攻花という言葉も初めて知りました。戦争がテーマの絵本、例えば「まちゃん」(作：松谷みよ子 絵：司修)や「地雷ではなく花をください」(絵：葉祥明 絵：柳瀬房子)も胸にこみ上げるものがあり、折に触れ、平和について考えさせられます。「すみれ島」も忘れられない1冊となりました。

子ども達と過ごす日々の中で、私達保育者にできることを考え、実践していることの1つが対話の時間、ピーステープルや子ども会議にも表れる「話し合うこと」「自分の気持ちや考えを言葉にすること、伝えること」「他者の気持ちや考えを聴くこと、共感すること」「互いの違いに気づき、認め合うこと」「赦しあうこと」。こうして言葉にするのは簡単ですが、実はとても難しいです。神様の一人子、救い主として生まれたイエスさま、同じように命を頂いて生まれた、かけがえのない子ども達、私達が互いの命を大切に、言葉と希望をもって赦しあい、ともに生きる喜びを見出せるようにと祈ります。2023年も感謝の日々でした。読んで頂きありがとうございました【園長】